



のびのび若っ子

「灯火親しむ」候を迎えて

副校長 小坂 佳

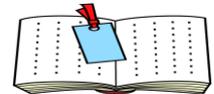
「灯火親しむ」とは、中国の古いことわざで「気候がさわやかで夜の長い秋は、灯火の下で読書するのに適している。」という意味だそうです。この時期、落ち着いて本を読むには最適な時です。若葉台小学校では、来月11月を読書月間として設定しました。この間、学校独自の取組として、「読書ゆうびん」を実施します。これは、たてわり活動のペアにお勧めの本を紹介するものです。他には、読書クイズや読み聞かせ等、様々な取組を考えております。読み聞かせも、飛沫感染を防ぐために、直接読み聞かせをするのではなく、読み聞かせを動画で撮って流す方法を行う予定です。また、授業でも「ピブリオバトル」を取り入れるなど、様々なことが計画、実施されています。これには、子どもたちが読書に興味をもち、より多くの本を読んでもらいたいという願いが込められています。

読書がもたらす効果については、すでにいろいろなことが知られています。「語彙力が上がる」、「文章力が身に付く」等はよく知られているところです。その他にも、読書を通して未知の世界に触れることにより、実際の会話でも役に立つことが多く、コミュニケーション能力が上がることもわかっています。また、創造力や記憶力が高まることで、脳の働きが活性化されることも解明されています。

では、新たなことを知るといって点で共通なテレビや映像との違いは何でしょうか。テレビや映像は目と耳で情報を得ますが、読書は目から情報を得ます。目から情報を得るといことは、その背景や情景、考え等を様々に想像することができます。100人いれば、100通りの想像力が働くといってもよいでしょう。想像することでさらに脳が活性化され、一つの事象に対して多くの考えをもてるようになり、より心豊かな人間に成長することにつながります。それだけ、読書には奥深いものが隠されています。

子どもたちに、ただ「本を読みなさい。」と言うだけでは、読書への興味はあまりわかないでしょう。子供が興味をもって手に取った本を、読書にふさわしくないと他の本と差し替えるのではなく、温かく見守ってあげたり、また、親と子が一緒に読書する時間を設けたり、時には読み聞かせをしてあげたり等のきっかけがあって、子どもたちが自発的に読書する習慣が身に付くのだらうと思います。読み聞かせの時に、「おしまい」と本を閉じるとすぐに、「読んで。」という子ども。これは、「もっと一緒にいたい。」というサインと言われています。愛情を感じながら楽しむ読書は、家族の温かいつながりをつくります。

涼しい秋の夜長、時にはテレビやゲームのスイッチをオフにして家族そろって灯火に親しんでみてはいかがでしょうか。



さて、10月3日(土)に予定されております、WSC(若小 スポーツスマイル カップ)ですが、ぜひとも好天に恵まれて、一回で実施できるとよいですね。コロナ終息の見通しがもてない中、実施については、教職員で検討を重ねてまいりました。多くの学校行事が中止あるいは延期される中、児童の意欲を高め、一体感をもって取り組める行事として位置づけ、感染対策を万全にして、実施することといたしました。すべては、子どもたちの笑顔を決やさないため、これからの学習活動への意欲付けのためです。趣旨をご理解いただき、当日はご協力をよろしくお願いいたします。



若葉台小学校学校教育目標

『自他共に大切にすること』『意欲的な学びの芽を育みます』